

平安時代の漢文訓読語の分類

近藤泰弘

1 問題のありか

現在観察できる平安時代の言語資料に含まれる単語には位相的にいろいろな種類のものがあり、そのひとつの種類として、和文系の語彙と訓読系の語彙という形の区別があるということが明らかにになったことは、訓点語研究史の中できわめて大きな成果の一つと言える。また、それらの中でかなりの数の語彙が、和文特有語（「いみじく」「されども」「すさす」または訓読特有語（「はなはだ」「しかれども」「しむ」等）といった形で明確な使い分けがあることも研究されてきた（築島¹⁹⁶³）。しかし、残された多くの語については、それらが位相的な性格において中立であるものなのか、あるいは特殊な位相の語であるのかといったことについて、不明な点もまだ多い。ところで、一般に、和文の文学の研究において、特に和漢比較研究の立場から見ると、漢籍から得られた知識や表現が日本の古典文学の作品形成上に大きな影響を与えていることが知られている。しかし、その影響の大きさに比して、和文の文学作品中に訓読文に由来する語彙がそれほど多くは存在しないように見えることは、稿者の考えではやや奇異なことと思われる。そこで、本論文では、先の位相の問題と絡めて、従来研究対象となつてこなかったと思われる語彙について、訓読系の語彙と和文系の語彙との交渉という観点から、調査し

てみることにする。（土井¹⁹⁹¹・金子¹⁹⁹⁸などが、別の観点からこの問題に触れている。）

2 改編本系類聚名義抄の語彙の利用

ところで、和文系・訓読系の語彙を計量的に分析した研究の最初のものである築島¹⁹⁹⁹では、『源氏物語』と『大慈恩寺三藏法師伝』古点（和訓）のそれぞれの異なり語彙を相互に比較し、一方には存在するが、他方には存在しない語を算出すること（以下、この処理を「引き算」と称する）により、それぞれの資料の語彙の特徴を求めたことを行った。

- 慈恩傳―源氏Ⅱ訓読（点）特有語
- 源氏―慈恩傳Ⅱ和文特有語

この手法は語彙論の上できわめて有効な研究手段であり、現在でもその有効性は損なわれていないと考えられる。そこで、本論ではコンピュータによる大量処理によって、さらに別の角度からこの手法を応用してみたい。

具体的には『観智院本類聚名義抄』の総異なり語彙を既成の索引からリストアップし、この全体から、『慈恩伝古点』の総異なり語彙（築島氏索引からリストアップ）を引き算する。この操作によって、純粹の訓読文にはない雑多な語彙が集められることがひとまず予想される。なお、この語彙群には、処理の原理からして、訓点と和文とに共通するごく普通の語も除外されているのでさらに特殊性は強くなっている。このようなものは、さきに述べたように、いまだその素性がよくわからない語彙群の大きな部分を占めると予想されるのである。その異なり語彙数は次のようになる。

●名義抄 (8272 語) — 慈恩伝 (1810 語) = 6878 語

このようにその差分としては、六千語あまりの異なり語が抽出される。そのア行冒頭の例を本要旨の最後の付表1に示す。

あまりにもその残数が多いので、辞書に対してこのような手法を適用することは、何か問題があるのかと疑われるので、テストとして別の引き算を行ってみる。例えば、おなじ方法で『倭名抄』（通行十巻本と二十巻本の総合語彙）から『名義抄』を引き算してみると、次のようになる。

●倭名抄 (2740 語) — 名義抄 (8272 語) = 632 語

この残った632語は仮名遣いの相違や写本の本文系統の相違によるものなど様々であるが、もつともまとまった部分は、二十巻本の地名部を含む巻（五〇九）に存在する、官職名などの語彙100語程度（「いつきのみやのつかさ」「うちとねり」「つはものつかさ」等）である。名義抄編纂のどの段階が影響しているかは別途検討すべきであるが、名義抄には、倭名抄の、地名部を含む巻の語彙はまったく取り入れられていない

ことは明白になる。これは、一例であるが、このようにクリアな形で結果を得ることからこの方法の有効性を知ることができよう。

さて、次に先の引き算の結果の語彙の一部について検討を加えてみる。例えば、次の「あきなふ」以下は、いずれもここで示したリストに含まれる語であるが、現代ではごく普通の語であると言ってもいいものである。しかし、その分布には少しく偏りが見られる。諸文献によって代表的な出典を記した。なお、訓点資料の語彙については、築島²⁰⁰⁷に多くを依った。

- 1 あきなふ・あきなひ（適・賣・交易・市・商・傭など）：「いとかたきあきなひなり」（竹取）「その物をたくはへて市し、あきなはばこそ」（宇津保・藤原の君）「商働（まうく）て来還（まうく）るとき」（書紀・欽明・寛文版本）「之を質（アキナヒ）て」（西大寺本金光明最勝王経古点）「利を逐ふ（別訓・アキナヒす）」（大唐西域記長寛点）「立（て）賣可（アキナフ）（し）」（書陵部本群書治要・春秋左氏伝・建長点）「商アキナハシム」（長承三年本・三教指帰注集）「貨アキナヒ」（大日経義釋・治安四年点）「両方アキナウヤウニスルゾ」（史記抄）「アキナフ」（大般若経音義・無窮会本）「質アキナフ」（法華経单字）
- 2 あげつらふ（論・章）：「論（アケツラフ）に 諧（かな） ふときは」（書紀・推古・岩崎本）「至理を抑揚（アケツラフ）」（大唐西域記長寛点）「論（アケツラフ）」（醍醐寺本遊仙窟）「揚アケツラフ」（三教指帰・久寿二年点）「訝アケツラフ（ソ）」（大日経疏・永久二年点）「論（アケツラフ）」（塵芥）「論（アケツラフ）」（版本合類節用集・遊仙窟）
- 3 あらがふ（扱・誼）：「馬子宿禰諍（アラカヒ）て」（書紀・敏達・前田本）「こ」と人とあらがふべくもあらず」（源氏・常夏・他8例）「魚ニアラズ

トアラガフ」(観智院本三宝絵)「争アラカフハ」(史記・延久点)「争カフ」(興聖寺本大唐西域記・平安中期点)「君子は争アラカフ 所无シ」(書陵部本群書治要・礼記・康元点)「争アラカヒ」(書陵部本春秋経伝集解・弘安元年点)「諍アラカフ」(世俗諺文・鎌倉中期点)「アラガウヲ云ゾ」(蒙求抄)「諍アラカヒ」(金光明最勝王経音義・承暦三年)「論アラカフ」(法華経音訓・至徳三年版本)

4 うながす(催・促・趣・御・唱など)：「ほととぎす、われをうながす(吾乎領)」(万葉・一九六一・旧訓「われにしをせて」)「百姓領ウナカサ れずして」(書紀・仁徳・前田本)「御車うながしてむ」(大和)

「さぎなる男ども、とう、うながせや、など行ふ」(蜻蛉日記)「産を趣ウナカ して」(史記・呂后本紀・延久点)「駕を促ウナカシ」(書陵部本群書治要・孔子家語・建長点)「民を趣ウナカシ」(同・礼記・康元点)「促ウナカス」(大日経疏・康和四年点)「促ウナカス」(文鏡秘府論・保延四年点)「勧進ウナカシて」(大唐西域記・長寛元年点)「重山ノ深キニ促ウナカ シ奉ル」(太平記・九)「促ウナカス」(大般若経字抄)「詔ウナカス」(法華経单字)

5 うやうやし(共・恭)：「宇夜字也自久」(続日本紀宣命)「恭ウヤ」(書陵部本群書治要・尚書・建長点・他に 10 箇所)「恭ウヤウヤシカラ」(古文孝経・仁治二年点)「恭ウヤウヤシキトキは」(五行大義・元弘三年点)「人をわかずうやうやしく」(徒然草)「貌ハウヤウヤシカラントヲ思」(応永本論語抄)「恭ウヤウヤシ」(法華経音訓・至徳三年版本)「Vyavyaxiqi」(羅葡日辞書)

6 かほよし(姪・妖・好・麗・美など)：「あやにくやしらずしそのかほよき(可抱与吉)に」(万葉・東歌・三四一一)「たまならずもありけんを」と人いはんや。されども「ししこかほよかりき」といふや

うもあり」(土佐日記)「妍カホヨキ」(石山寺本法華義疏・平安中期点)「妍カホヨク 麗わし」(大唐西域記・平安中期点)「容カホヨキ」(三教指帰・久寿二年点)「好カホヨク」(大日経疏・保安元年点)「好カホヨキ」(医心方・天養二年点)「好カホヨシ」(史記秦本紀・天養二年点)「麗カホヨキ哉カナ」(前田日本書紀古点)「即妹カホヨントス 為」(定家本奥入所載・白氏文集秦中吟)「姿首トカホヨキ」(真福寺本遊仙窟文和二年点)「かほよからん婿とらん」(宇治拾遺)「コヽニ若テカヲヨイ者ガアルハ」(毛詩抄)

7 こはし(強・剛・忍・努・勉・旗など)「このおきなきものはこはく侍る」(竹取)「こはき力をはげみて」(宇津保・俊陰)「人性は剛コハク」(大唐西域記)「この文のことは、いとうたて、こはく」(源氏・若菜・この一例のみ)「こはき物の怪の」(枕草子)「こはからぬ烏帽子」(枕草子)「剛コハキ力」(西福寺本大般若涅槃経・平安後期点)「剛コハク」(大日経疏・永久二年点)「強コハク」(南海寄帰内法伝・長和頃点)「強コハキ」(史記延久五年点)「強コハシ」(最明寺本往生要集・院政初期点)「強コハキ」(書陵部本日本書紀・英治二年点)「強コハシ」(史記秦本紀・天養二年点)「競コハシ」(春秋経伝集解・保延五年点)「彊コホキトクシハ」(書陵部本群書治要・周書・鎌倉時代点、その他例多し)・凶書寮本名義抄(「詩」)・「健コハシ」(法華経单字)「健コハシ」(無窮会本大般若経音義)

8 さやかなり・さやかに(皎・慧・月苦・灣・冷・晴)：「君が上はさやかに(左夜加爾)聞きつ」(万葉)「了然サヤカニ 痊たひらさき」(ぬ)「(天理本金剛般若経集験記)「了解サヤカニワイワイシ」(石山寺本妙法華経玄贊平安中期点)「其の声、鏗鏘サヤカにして」(日本書紀・応神・北野本)「分明サヤカニシテ」(石山寺本高僧伝・長寛元年点)「あききぬ

とめにはさやかにみえねども…」（古今・藤原敏之）「月さしいでて
こなたはまださやかならねど」（源氏・絵合）「玲瓏サヤカナル」（三
教指帰・久寿二年点）「蕭然サヤカニ」（大日経疏・仁平元年点）「寥
亮トサヤカニシテ」（醍醐寺本遊仙窟・文和二年点）

9 つかさどる（使・掌・御・典・主・守・戸・司など）「四季ヲツカサ
トル」（慈恩伝・九・裏書・本文傍訓に無し）「おほやけさまにて、さ
る所の事をつかさどり、まつりごとのおもぶぎをしたためしらむこ
とは」（源氏・御幸・一例のみ）「王・民を司敬ツカサトル」（尚書・平安中期
点）「主ツカサトルコト」（史記・延久五年点）「主ツカサトル」（大
日経義釋・延久六年点）「典ツカサトルしめ」（漢書楊雄伝天曆点）「主ツ
カサトル」（白氏文集・天永四年点）「主（ツカサ）トル」（辨正論・
保安四年点）「主ツカサトル」（三教指帰注集・長承四年点）「主ツカ
サ（ト）ル」（東大寺図書館本大般涅槃經・平安後期点）「掌ツカサト
ル」（石山寺本菩薩戒經・長和五年点）「是レツカサトラントナリ（書
陵部本群書治要・春秋左氏伝・建長点、その他例多し）」「司ドル官
ナリ」（中華若木詩抄）「典ツカサトル」（法華經單字）

10 なだむ（宥・寛・挺）：「奈太每賜（ひて）」（続日本紀宣命）「はばか
るところなく、例あらんにまかせてなだむることなく厳しう行へ。」
（源氏・乙女）「宥ナタム」（大日経義釋・延久六年点）「宥ナタメラ
レ」（高僧伝・康和二年点）「寛ナタム」（三教指帰注集・長承四年点）
「意を寛ナタメて」（東大寺本大般涅槃經平安後期点）「世尊ナタメて曰く」
（大唐西域記・長寛点・その他例多し）「宥ナタメ」（書陵部本群書
治要・尚書・建長点、その他「周易」「春秋左氏伝」「周礼」などに
有り）「其の罪を宥ナタめ」（太平記・五）「慰ナタム」（法華經音訓・至
徳三年版本）

11 はむ（ん）べり（倍・偏・侍・御・在など）「侍宿トシギニハムヘラムトす」（書紀・
皇極・岩崎本）「みやつかへつかうまつるべくもあらずはんべるを」
（竹取）「はばかること多くすぐしはむべるを」（源氏・蓬生）「李調
侍ハシベリ」（書陵部本群書治要・礼記・康元点・その他例あり）（小林
七九八ページ参照）

12 ゆくさき（将来・往・向後）「闇の夜のゆくさき（由久左伎）知らず」
（万葉・四四三六）「ゆくさき多く」（伊勢）「前ユクサキノ」（東大寺
諷誦文稿）「去前ユクサキ」（延喜式・平安後期点）「未然ユクサキを」（書紀・
推古・岩崎本）「往ユクサキ」（古文尚書・平安中期点）「以往ユクサ
キハ」（地藏十輪經・元慶七年点）「來ユクサキ」（南海寄帰内法伝・
大治三年点）「往ユクサキ」（蘇悉地羯羅經・治安三年点）「今より
已往ユキサキは」（東大寺本大般涅槃經平安後期点）「以去ユクサキ」（大日
経疏・康和四年点）「ゆくさきををしみし春のあすよりは」（後撰・
躬恒・和歌にはある程度存在・源氏物語中も和歌のみ）「往ユクサキツシメ 欽」
（書陵部本群書治要・尚書・建長点）

これらの語を観察すると顕著な特徴が見られる。たとえば、最初の「あ
きなふ」であるが、現代語でも用いられるひじょうに一般的な語である
が、和文と仏典訓読語には例が少ないことがわかる。『法華經單字』や
『大般若經音義』といった音義書には用いられるが、実際の訓読での使用
例は見あたらず、これらの音義の訓がどの程度實際を反映しているかに
ついては疑問が残る。残りは『群書治要』のような漢籍あるいは、『大唐
西域記』『三教指帰』『書紀古訓』といった特殊な文献が残り、これらに
共通する性格は、「和文的」というよりは「漢籍訓読的」といった方が適
切であろう。以下の場合も含めて『大日経疏』や『大日経義釋』の訓読

に見られるのが例外だが、これはこの訓点か漢籍的な部分があることによると考えていいだろう。

「あげつらふ」も同様である。平安時代の分布状況から見ると、現代語に存在しているのが不思議なくらいであるが、これは『日本国語大辞典第1版』の「あげつらう」の項目が述べるように「古く、書紀古訓の他には、古辞書や訓点資料に見られるだけであるが、漢文訓読によって後世に伝わった。近世以後文章語として復活した」ということになる。この語についても、現在知られていない漢籍訓読の用例が多くあつて、それが深層にあつて、近世に復活したと考えるのがいいだろう。平安時代にいわゆる「和文語」であつたとは考えにくい。

「あらがふ」はやや異なつた位相を持つ。名義抄には存在するものの、『源氏物語』などの和文と、漢籍訓読との両方に出現する。そういう意味でごくふつうの語である可能性もあるが、だとすると、仏典訓読にあまり用いられていない理由がわからないことになる。その次の「うながす」もほぼ同様であり、和文と漢籍に共通する。

「うやうやし」も現代語では比較的普通の語であるが、古典語には類例が少ない。中世以前では、『徒然草』以外の用例はすべて漢籍訓読語である。仏典にはまったく存在していない。『法華経音訓』版本の訓は、おそらく法華経由来のものではないだろう。

「かほよし」も、ほぼ「あきなふ」などと同様の位相を持つ。漢籍訓読的と言える。平安和文では『土左日記』の「ししこかほよかりき」が例外となるが、これは『土左日記』の特殊位相を示すものであつて、かへつて「かほよし」の特異性を証明するものとなるだろう。「こはし」もほぼ同様であり、和文に出てくる例は、それぞれの作品や文脈の特殊な位相によるものと考えたい。「怖い」というような現代語におけるごく通

常の語が、このような出自を持つことはひじょうに興味深い。

「はむべり」は、明らかに和文系の語で、それが『日本書紀』古訓などを經由して、辞書に転載されたものであろう。

以下省略するが、このように、これらの語は浩瀚な慈恩伝古点に用いられないだけあつて、仏典訓読の中には確かに使われにくいものに対し、和文や漢籍等の訓読には用いられていることがある。仏典訓読でも、古くから和文との共通性が説かれる『大唐西域記』『三教指帰』などを始め、『大日経疏』の訓など明らかに偏りがある。現代語での分布が広範であることから類推して、きわめて特殊な語であつたとは考えにくい。これらの語の位相をどのようにとらえるかは問題である。名義抄の総異なり語数から見ても、慈恩伝と共通する語(1394語)よりも、こちらの方がはるかに多いのである(6878語)。

ひとつの考え方としては、もともとの和文語のうちのある部分が訓読文に用いられたとも考えられるが、先にあげた数千語の語がすべてもともと和文系統の語彙であり、それが名義抄に取り込まれるというようなルートは考えにくい。(築島¹⁹⁹²によれば一部はそのような語があるらしいがその例は少ないと考えられる。)

むしろ、ひとつの仮説として考え得るのが、これらの特殊な語彙の多くが漢籍の傍訓出自ではないかという推測である。すでに多くの説があるように(築島¹⁹⁵⁰・山本¹⁹⁸⁵など)、名義抄は基本的には仏典や漢籍の傍訓、古辞書の和訓などの集積からなっていると考えられるからである。すでにいくつかの語でその例を示したが、次の節ではその仮説を元にならに考察してみたい。

3 残された訓読語彙について

先の操作では、残った語群が和文系のもか訓読系のもかが不明な部分があった。そこで、先の仮説を検証するために、先に得た語彙群から、さらに『古典対照語彙表』（万葉・竹取・伊勢・古今・土佐・後撰・蜻蛉・枕・源氏・紫式部日記・大鏡・方丈記・徒然草）の総異なり語彙（漢語も含むために語彙数は相当多い）を引き算する。これによって、文に通常現れる普通の語彙は落とされてしまうために、残った語彙は基本的に訓読系統の語彙にほぼ限定されると考えられる。結果は次のように約五千語が残る。

3・1 語彙の一部のリスト

- 1 あつらふ（勸・憑・詔・嘱など）：書紀
北野本・落窪・古今六帖（近藤1998）による
と、『六帖』は訓読系の語彙を含む）・宇
治拾遺・白氏文集天永点・大日経疏康和
点・前田本冥報記・蘇悉地羯羅経治安点・
大日経疏元暦点
- 2 あやかる（丑・呵）：古今六帖・拾遺集・
三教指帰注集長承点・袖中抄・毛詩抄・蒙
求抄
- 3 あらく（繩・散・紵）：書紀図書寮本古点・
金剛般若経集験記天永点・法華経伝記大
治点・書陵部日本書紀永治頃点・建立
曼荼羅護摩儀軌長暦点・古今六帖・太平
- 4 う（つ）たふ（訟）：今昔・三教指帰集
注長承点・大日経義釋演密鈔長承点・文
鏡秘府論保延点・法華文句平安後期点・
白氏文集天永点・金剛般若経集験記天永
点・大唐西域記建保点・日本高僧伝要文
集建長点・東洋文庫旧蔵日本書紀平安後
期点・「獄」（書陵部本群書治要）・平家
- 5 うらおもふ（慮・夷猶）：「うらおもふこ
ころおもほえぬかも」（古今六帖・三九四
四）・三教指帰久寿点・うらおもひ（史記
抄・六臣注文選応永点・法華経音訓）・法
- 6 おぎぬふ（補・裨）：西福寺本大般涅槃
經平安後期点・三教指帰注集長承点・春
秋図書寮本名義抄・春秋経伝集解保延点・
医心方天養点・前田本日本書紀院政期点・
大唐西域記長寛点・たまきはる・書陵部
本群書治要・古文孝経仁治点・高山寺本
莊子鎌倉中期点・東洋文庫本史記鎌倉初
期点・前田本色葉字類抄序鎌倉中期点
- 7 おきのる（貸・典・貫・酤）：白氏文集
天永点・文鏡秘府論保延点・大日経疏康

名義抄 (8272 語) - 慈恩伝 (1810 語) - 古典対照語彙表 (21506 語) 11
5161 語

なお、このように引き算した結果が、先の結果からあまり多くは減らないことは興味あることである。すなわち、もともと先の語群全体が訓読系統の語彙であることを示しているデータであると考えられるからである。次にその五千語の中から一部興味深い語をピックアップして見てゆくこととする。それぞれについて、代表的と思われる出典を記したが、網羅しているわけではない。おおよその傾向のひとつとして見ていただきたい。

- 和点・尊勝仏頂真言宗瑜伽法嘉承点・玉塵抄・四河入海・法華經單字・法華經音訓版本
- 8 かいつくろふ(刷・鉋・釵・樞など)：宇津保・白氏文集天永点・極楽遊意長承点・三教指帰久寿点・今昔・和漢朗詠集私注永正五年点・玉塵抄・太平記・法華經單字
- 9 かいならず(櫟)：「楽器をかき鳴らす」の意。諸書になし。
- 10 かいほさむ(鬪)：書陵部日本書紀院政期頃点・平家・宇治拾遺・太平記
- 11 かきしるす(署)：「書記」須(続日本後紀)・文明本節用集・玉塵抄
- 12 かくれさる(庇)：諸書になし。
- 13 かくれみち(間道)：倭名抄・今昔
- 14 かたつぶり(蝸牛・蝸・蹊螺)：新撰字鏡・倭名抄・大般若經字抄・堤中納言・仁和寺本医心方院政期点・無窮会本大般若經音義・
- 15 かたきあり(両)：宇津保俊陰・今昔・五行大義元弘点・法華經音訓版本
- 16 かたきなし(隻・參)：色葉字類抄・五行大義元弘点・「周易と申す文には、一文字をばかたきなしと詠みて」(太平記)・四
- 河入海・法華經音訓版本
- 17 かぶろ(なり)(禿・童)：書陵部日本書紀院政期頃点・新撰字鏡・倭名抄・東大寺本大般若涅槃經平安後期点・法華文句平安後期点・秘藏宝鑰建久点・栄花・今昔・平家・毛詩抄・玉塵抄・法華經音訓版本
- 18 かほばせ(面子)：倭名抄・色葉字類抄・法華義疏長保点・真福寺本遊仙窟文和点・百座法談聞書抄・法華經音訓版本
- 19 かみそり(剃刀)：宇津保・和名抄・三教指帰注集長承点・往生要集院政期点・太平記
- 20 からき(枯)：古今六帖・宇津保・新撰字鏡
- 21 きこり(樵など)：宇津保・弘決外典抄弘安点・大唐西域記長寛点・玉塵抄・太平記
- 22 きびす(踵・躔・跟など)：倭名抄・宇津保・菩薩善戒經弘仁頃点・大智度論天安点・大般若經字抄・大般若經三十二相八十種好院政書紀点・南海寄帰内法伝大治点・医心方天養点・弥勒上生經贊院政期点・東寺藏大日經疏平安後期点・無窮会本大般若經音義・宇治拾遺・応永本論語抄
- 23 くぐまる(跼)：古今著聞集・書陵部本群書治要・法華經山家本裏書・太平記
- 24 くぐもる(奄など)：色葉字類抄・今昔・書紀神代兼方本・金光明最勝王經註釈平安初期点
- 25 くさぎる(芸・擗・斫など)：新撰字鏡・大日經疏康和点・弘決外典抄弘安点・書陵部本群書治要・史記抄・応永本論語抄・法華經音訓版本
- 26 くじく(挫・屈・振など)：書陵部日本書紀院政期点・石山寺本瑜伽師地論平安初期点・菩薩善戒經弘仁頃点・三教指帰注集長承点・新撰字鏡・世俗諺文・大唐西域記長寛点・俱舍論音義抄貞応二年・史記延久五年点・知恩院藏冥報記院政期点・金剛般若經集驗記天永点・医心方天養点・書陵部本群書治要・史記抄・法華經音訓版本
- 27 くつね(狐)：文鏡秘府論保延点・書陵部本群書治要・法華經音訓版本・毛詩抄・謡抄
- 28 くつわづら(轡など)：新撰字鏡・倭名抄・書陵部本群書治要・往生要集院政期点・猿投本文選・四河入海

- 29 くみす(与・與・組など)：弥勒上生経贊
平安初期点・小川本大乘掌珍論天曆点・
漢書楊雄伝天曆点・大乘掌珍論天曆点・
図書寮本名義抄・史記秦本紀永万点・往
生要集院政期点・大日経疏康和点・大慈
恩寺大師画賛天承点・大日経義釋演密鈔
長承点・三教指帰注集長承点・法華経单
字・前田本日本書紀院政期点・大唐西域
記長寛点・書陵部本群書治要・平家・太
平記・史記抄・法華経音訓版本
- 30 ころ(畦・畔・など)：倭名抄・岩淵本
願経四分律平安初期点・文鏡秘府論保延
点・俱舍論音義抄貞応二年・書陵部本群
書治要・平家・莊子抄
- 31 けもの(獸)：倭名抄・北野本日本書紀・
靈異記興福寺本訓釈・大般涅槃経平安後
期点・金剛般若経集驗記天永点・文鏡秘
府論保延点・春秋経伝集解保延点・大唐
西域記長寛点・書陵部本群書治要・弘決
外典抄弘安点・蒙求抄
- 32 こながき(摺など)：和名抄・新撰字鏡・
醍醐寺本遊仙窟康永点・南海寄帰内法伝
平安後期点・書陵部本群書治要・五行大
義元弘点
- 33 しほからし(鹵・鹹)：大般涅槃経平安
後期点・蘇磨呼童子請問経承暦点・今昔・
玉塵抄・塵芥・易林本節用集
- 34 せくぐまる・せくぐむ(跼など)：北野
本日本書紀・図書寮本名義抄(玉抄云)・
世俗諺文・大般涅槃経平安後期点・書陵
部本群書治要・史記抄
- 35 たたむき(腕など)：古事記歌謡・倭名
抄・新訳華嚴経音義私記・菩薩善戒経弘
仁頃点・西大寺本金光明最勝王経平安初
期点・東大寺諷誦文稿・高山寺蔵一字頂
輪王儀軌音義平安初期点・前田本日本書
紀院政期点・白氏文集天永点・醍醐寺本
遊仙窟康永点・大般涅槃経平安後期点・
金光明最勝王経音義承暦点・三教指帰久
寿点・古文尚書正和点
- 36 たなうら(掌など)：倭名抄・地藏十輪経
元慶点・宇津保・書陵部本日本書紀院政
期点・仁和寺本医心方院政期点・法華経
单字・春秋経伝集解保延点・詩学大成抄
たなすゑ(手子・指頭)：倭名抄・東大
寺諷誦文稿・三教指帰久寿点・熱田本日
本書紀永和点・醍醐寺本遊仙窟康永点・
- 37 ついばむ(透・喙・咤など)：倭名抄・白
氏文集天永点・往生要集院政期点・三教
指帰集注長承点・書陵部本群書治要・来
- 38 迎院本日本靈異記院政期点・新修往生伝
保元点・無窮会本大般若経音義・弘決外
典抄弘安点
- 39 つくのふ(償)：北野本日本書紀・興福
寺本日本靈異記・成実論天長点・四分律
行事抄平安初期点・三宝絵観智院本・白
氏文集天永点・法華義疏長保点・龍光院
本法華経・金剛頂義訣永承点
- 40 つぐむ(噤など)：書陵部本群書治要・
色葉字類抄・太平記
- 41 とこふ(殉・呪咀・咀など)：春秋経伝集
解保延点・前田本日本書紀院政期点・御
巫本日本書紀私記・書陵部本群書治要
- 42 とらはる(囚)：願経四分律弘仁頃点・金
剛般若経集驗記平安初期点・法華論義草
平安中期点・国会図書館本日本靈異記訓
釈・金剛般若経集驗記天永点・大般涅槃
経平安後期点・五臣注文選平安後期点・
来迎院蔵安楽土義康和点・往生要集院政
期点・書陵部本群書治要・史記延久点・平
治物語
- 43 なまぐさし(腥・息など)：倭名抄・新撰
字鏡・金剛般若経集驗記平安初期点・九
条本尚書平安中期点・白氏文集天永点・
三教指帰集注長承点・医心方天養点・知

恩院本冥報記院政期点・大般若經字抄・
今昔・書陵部本群書治要

45 もとづく(本・厚)：文鏡秘府論保延点・
三教指帰注集長承点・古文孝經仁治点・

46 ゆびく(牖など)：春秋經伝集解保延点・
書陵部本群書治要・名語記・燈前夜話抄・

44 はうぶる(葬など)：史記延久点・書陵

五行大義元弘点・書陵部本群書治要・史

後漢書享祿点

部本群書治要・辨正論保安点・大日經義

記抄・毛詩抄・中華若木詩抄・法華經音

釋演密鈔長承点・発心集

訓版本・申樂談義

3・2 語彙のリストについて

このリストからわかるように、かなり雑多な語彙となっているが、やはり漢籍の出自かと思われる単語が多いことに気づかされる。「あやかる」は最古例は『拾遺集』であるが、平安の和文には他には例がない。それに対して、『毛詩抄』『蒙求抄』に存在し、名義抄にも多数の漢字の訓として収載されているところを見ると、平安時代には、漢籍の訓として一般的であったことがわかる。「くみす」などが典型的であるが、平安初期

訓点、漢籍訓読、そして、後世の和漢混淆文に出現する。「なまぐさし」「もとづく」なども現代語にもそのまま残存している基礎語であるが、このように見てくるといずれも平安和文に由来するものではなく、漢籍専用の訓読語としてしか古文獻には存在していない語である。このように語彙のグループを単純に集合演算するだけで、きわめて明瞭にほぼ漢籍由来と思われる語彙のみを抽出できていることがわかる。

4 まとめ

以上の操作によって明らかになったように、少なくとも、ここに取りあげた類の名義抄和訓のかなりの部分は基本的に漢籍の傍訓出自の語彙か、あるいは、古辞書(倭名抄など)由来のものであっても漢籍訓読と共通する語彙であると考えられる。訓読語としては、「漢籍訓読専用語」とでも言うべき一群の語彙が存在することが明らかになったと思う。また、それらは、従来考えられてきた訓読語の語彙の枠組みよりも、和文語彙との共通性の点で、範囲の広いものであると思われる。その中には、既に見たように、もともと和文と共通する単語も存在すると思われるし、

また一方、漢籍の訓読語であるが、そのニュアンスを保ったまま和文に取り込まれている語彙もあると考えられる。この両者を判別することには困難な点もあるが、その和文における分布を研究することでおおよその判断はつくものと思われる。

本稿のような方法によって、和文特有語・訓読特有語の概念がより明確になり、その中核の部分と周辺部分との相違や、その区別の起源についてもさらに確実な議論ができるものと考えている。また、和文にどの程度まで訓読語彙が含まれているかも、先の語例で示したように、相当

程度明らかにすることが可能になる。ちなみに、以上の分布を見る限り、『日本書紀』古訓や『大唐西域記』長寛点には、和文とは共通せず、漢籍の傍訓と共通すると思われる語彙がきわめて多い。厳密には数量的な裏付けが必要であるが、本考察の範囲では、この二つの資料の語彙は、漢籍の訓読との関係を重要視すべきであると考えられる。和文との共通性は、漢籍訓読語を介してのものではないだろうか。日本書紀の訓法においては漢籍の訓法との類似が説かれているが(小林¹⁹⁶⁹)、その結論への傍証となるものであろう。

もちろん、以上の説明だけでは、五千語という膨大な語のすべての説明はできるものではない。さらに検討が必要であろう。当然、訓読語内部の位相の問題は漢籍訓読だけにかかわる問題ではない、例えば、「かかはる」という語は名義抄になく、和文にもないが、仏典訓読には多用される。(慈恩伝―名義抄―古典対照語彙表の操作で取り出せる。)山本²⁰⁰⁶の述べるような「和漢混淆」についての根本的な考え直しも必要とされるだろう。また、今回は『古典対照語彙表』の全体を用いたが、『万葉集』を用いて引き算するなど、その他にも、いろいろな操作が考えられる。現在、国立国語研究所で通時コーパスの設計のプロジェクトを行っているが、そのコーパスを用いて語彙の通時的な流れを研究する予定である。それらの中に、この古辞書の語彙との対応を位置づけて、本稿で述べた「漢籍専用訓読語」とでもいべき一群の語彙の通時変化を検証していくことが次の課題である。

参考文献

- 金子彰「鎌倉時代の仏教者の語彙について―法然と親鸞の仮名書状に見られる和文語と漢文訓読語」(『東京女子大学比較文化研究所紀要』59・1998)
- 小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』(東京大学出版会・1967)
- 小林芳規「日本書紀古訓と漢籍の古訓読―漢文訓読史よりの一考察―」(『佐伯梅友先生古稀記念国語学論集』表現社・1969)
- 近藤みゆき「古今和歌六帖の歌語―データベース化によって見た歌語の位相―」(『歌ことばの歴史』笠間書院・1998)
- 築島裕「類聚名義抄の倭訓の源流について」(『国語と国文学』27・7・1950)
- 築島裕『平安時代の漢文訓読語につきの研究』(東京大学出版会・1963)
- 築島裕「平安時代の訓点資料に見える「和文特有語」について」(『文化言語学』三省堂・1992)
- 築島裕『訓点語彙集成』(汲古書院・2007～2009)
- 土井光祐「明恵上人関係法談聞書類の本文の性格について」(『訓点語と訓点資料』87・1991)
- 山本真吾『平安鎌倉時代に於ける表白・願文の文体の研究』(汲古書院・2006)九七九ページ。
- 山本秀人「改編本類聚名義抄における文選訓の増補について」(『国文学攷』105・1985)

補記：本稿は、第八〇回訓点語学会研究発表会(平成十一年五月・於同志社大学)において発表した「平安時代の和文における訓読語彙の種類分析―コンピュータを用いて―」をもとにしてしている。また、国立国語研究所基幹型プロジェクト「通時コーパスの設計」(プロジェクトリーダー・近藤泰弘)の成果の一部を用いている。なお、元となった訓点語学会での発表以後に、築島裕『訓点語彙集成』が刊行されたため、本論文にまとめるために、当該書から多大な恩恵を受けたことを特に記しておきたい。

5 付表1 (名義抄―慈恩伝の冒頭部分データ)

アイ	アカタ	アキナヒ	アクルニ	アサクサ
アイス	アカチノフ	アキナヒカフ	アクロ	アサケ
アイタレ	アカツク	アキナフ	アケ	アササ
アイツツシ	アカツチ	アキヒト	アケウメ	アサシホ
アイヒル	アカネ	アキムシ	アケカスカヒ	アサシホユフシホ
アウ	アカハタカ	アキラカナリ	アケクタスニ	アサタネ
アウシチ	アカハタカナリ	アキラカニ	アケタリ	アサチ
アウタ	アカハタカニシテ	アキラカニアリ	アケチ	アサツキ
アエク	アカヒユ	アキラカニナリ	アケツラフ	アサツル
アエタリ	アカホシ	アキラケシ	アケヌ	アサナハレリ
アカ	アカマクサ	アキラナリ	アケノヒツ	アサナル
アカアツキ	アカラカナリ	アキヲサメ	アケハリ	アサヌノ
アカイロ	アカラサアニ	アケカル	アケハル	アサネラフ
アカカカチ	アカラサマ	アクタ	アケヒ	アサハヤカ
アカカネ	アカラシ	アクタハカリ	アケホノ	アサハヤカナル水
アカカネノホトキ	アカラシク	アクタハラフ	アコエタリ	アサハヤカニ
アカカリ	アカラシマニ	アクトル	アコメ	アサハル
アカキキヒ	アカラメ	アクト	アコメキヌ	アサハレリ
アカキツチ	アカリヌケテタリ	アクナフ	アコエ	アサハレル
アカキハシル	アカエムハ	アクヒ	アサカヘス	アサハレルナハ
アカクロナリ	アキシヒ	アクヒノヒス	アサカホ	アサヒ
アカサ	アキト	アクフ	アサキミツ	アサフ
アカサノハヒ	アキトフ	アクラ	アサク	アサホラケ

アサマツリコト	アシカル	アシノウラ	アセモ	アタマシクシテ
アサミ	アシキヌ	アシノクヒ	アセ水	アタム
アサミツ	アシキモノ	アシノハナ	アソヒ	アタラ
アサムキカカヤカス	アシキヤマヒ	アシハラ	アタカモ	アタリ
アサムク	アシキル	アシハラカニ	アタカル	アチ
アサムル	アシケタリ	アシフチ	アタコト	アチキナ
アサヤカナリ	アシスリ	アシマキ	アタシ	アチキナシ
アサヤカニ	アシスル	アシヨネ	アタタカナリ	アチチ
アサラケキ	アシタカクモ	アシラタシ	アタタカニ	アチマム
アサラシ	アシタカノクモ	アシワケノツクエ	アタタマル	アチマメ
アサラメコト	アシタタス	アシワタ	アタタム	アツカカ
アサル	アシタツ	アシキ	アタツ	アツカハシ
アサレタリ	アシツノ	アシヲ	アタツル	アツカフ
アサワラフ	アシトチヒク	アシヲル	アタハカリ	アツキ
アシウラ	アシトル	アシヲレ	アタハナ	アツキノハナ
アシカシ	アシナハ	アス	アタハラ	
アシカナヘ	アシナヘ	アセシホル	アタマ	
アシカラミ	アシナヘクムマ	アセナカス	アタマキ	

「こんどうやすひろ、青山学院大学教授／国立国語研究所客員教授」